

運動継続のための大学運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の関係

中須賀巧¹⁾, 阪田俊輔²⁾, 杉山佳生²⁾

¹⁾ 福山平成大学

²⁾ 九州大学大学院人間環境学研究院

キーワード: 熟達雰囲気, 成績雰囲気, 自己開示, 満足感, 共分散構造分析

【要約】

本研究の目的は、運動部活動における動機づけ雰囲気が自己開示、満足感に及ぼす影響について検討することである。大学の運動部活動に所属する選手 138 名(男子 80 名, 女子 58 名, 平均年齢 20.1±1.04 歳)を対象に調査を実施した。調査内容には、運動部活動における動機づけ雰囲気測定尺度(熟達雰囲気 4 項目, 成績雰囲気 4 項目), 自己開示測定尺度(4 項目), 満足感(クラブ自体への満足感 2 項目, 部員への満足感 2 項目)を設定した。変数間の影響を検討するために共分散構造分析を行った。分析の結果, 成績雰囲気は自己開示および両方の満足感(クラブ自体への満足感, 部員への満足感)と影響を示すパスは確認されなかった。一方, 熟達雰囲気は自己開示に影響を与え, その自己開示が両方の満足感(クラブ自体への満足感, 部員への満足感)に影響を与えることを示すパスが確認された。これは, 熟達雰囲気であると強く認知されることによって, 選手の自己開示が促進され, クラブ自体やそこでの部員との人間関係に対して満足だと思えるのではないかと示唆される。以上のことから, 将来的に運動を継続するためには, 熟達雰囲気を強調した運動部活動を実施していくことが重要であると考えられた。

スポーツパフォーマンス研究, 8, 1-13, 2016 年, 受付日: 2015 年 3 月 12 日, 受理日: 2016 年 1 月 12 日

責任著者: 中須賀巧 広島県福山市御幸町上岩成正戸117-1 nakasuga@heisei-u.ac.jp

* * * * *

Relationships among motivational climates, self-disclosure and satisfaction on university athletic club activities for exercise adherence

Takumi Nakasuga¹⁾, Shunsuke Sakata²⁾, Yoshio Sugiyama²⁾

¹⁾ Fukuyama Heisei University

²⁾ Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Key words: mastery climate, performance climate, self-disclosure, satisfaction, structural equation modeling.

[Abstract]

The purpose of this study was to examine the relationships among perceived motivational climates, self-disclosure, and satisfaction for university athletic club activities. The sample comprised 138 university athletes (80 males and 58 females, mean age =20.1±1.04). The measures used included a questionnaire on motivational climates in athletic club activities (4 items for mastery climate and 4 items for performance climate), self-disclosure measuring scale (4 items), satisfaction scale (2 items for satisfaction with athletic club and 2 items for satisfaction with members). As the result of analysis with structural equation modeling, the performance climate had no influence on self-disclosure and two aspects of satisfaction (satisfaction with athletic club and satisfaction with members). On the other hand, the mastery climate had a positive influence on self-disclosure, which in turn had a positive influence on two aspects of satisfaction (satisfaction with athletic club and satisfaction with members). This results suggested that if athletes perceived mastery climate intensely, their self-disclosure is promoted, and their two aspects of satisfaction are promoted (satisfaction with athletic club and satisfaction with members). In conclusion, exercise adherence is emphasizing the mastery climate on athletic club activity.

I. はじめに

運動部活動経験は、中高年以降の運動習慣を定着させる要因の一つであり(岡田ほか, 2003), また将来的なスポーツ活動を促進する示唆もある(鶴山・大門, 2005). しかし, 運動部活動に専心することによって, 人間関係のあつれき(青木, 1989), 部活内でのコミュニケーションや練習に対する成就感の低減(横田, 2002)など運動部活動に対する満足感の欠如が原因となり, 運動部活動から退部していく選手が多いことも確認されている. つまり, 運動部活動参加者の将来的な運動継続には, 単に運動部活動に所属しているだけではなく, そこでの経験について, どの程度満足をしているのかという運動継続のための選手の(所属チームへの)満足感が大切になる.

運動部活動場面の満足感を検討している研究について概観すると, 角谷・無藤(2001)は, 運動部活動での満足感が学校生活全体の満足感の向上に影響を及ぼしていることを見出している. 青木・松本(1997)は, 過去および現在のスポーツ経験の中でも特に運動部活動を通して楽しさ, 生きがい, 自己有能感を得ることを体験した部活動満足感の高い部員は, その後のスポーツ活動に積極的に関与していくと結論づけている. 浪越ほか(2003)は, 運動部活動に対する満足感は生涯スポーツを促進するための基盤になるものとし, それを維持・向上する運営が必要になることを述べている. 以上のように, 運動部活動場面の満足感に関して, 生涯スポーツや学校生活全体に良好な影響を示すことについての検証はされてきたが, どういったチームの雰囲気づくりを行えばよいのかという環境要因に関わる概念と運動継続のための満足感との関係を論じた研究はほとんどされてこなかった. また, 日本一を目指すチームもあれば, そうではないチームもあり, それに則したトレーニングを実施していれば選手の満足感につながる可能性はあるが, それがどのような雰囲気の下で行なわれているのかについては明らかにされていない. 運動継続のための選手の(所属チームへの)満足感を高めるためには, どのようなチームの雰囲気づくりを行うことが有効となるのかを検討していく必要があるだろう.

運動部活動におけるチーム雰囲気を捉える概念の一つに動機づけ雰囲気^{注1)}がある. これは, 成績雰囲気と熟達雰囲気^{注2)}の2つの側面に大別されている(Ames and Archer, 1988; Seifriz et al., 1992; Papaioannou, 1994). バスケットボールや体操など様々な種目の選手を対象に動機づけ雰囲気とフロ一体験の関連を検討した Moreno-Murcia et al.(2008)は, 成績雰囲気と熟達雰囲気の両雰囲気がフロ一体験を促進するが, その効果は成績雰囲気よりも熟達雰囲気の方が強いことを示唆している. また, サッカー選手を対象にした動機づけ雰囲気, 心理的欲求, 競技の継続意志の関連性を検討した Ommundsen et al.(2010)は, 競技を継続しようとする意志を喚起するには熟達雰囲気を促進することが効果的と結論づけた上で, 一部, 成績雰囲気が寄与する可能性があることも報告している. このように, 様相の異なる動機づけ雰囲気は, その認知のされ方によって, 後の結果に多様な効果を呈することが予想されるため, 運動部活動における満足感の喚起に効果的なチーム雰囲気を検討できる重要な概念になると思われる.

ところで, 部活動での満足感を考える場合, 選手同士で自分はどういう人間かを他者に知ってもらうために自分の特徴や感情, 思想などを言葉で伝えようとする行為である自己開示(丹羽・丸野, 2010; 高見, 1996)も重要であり, 運動部活動の中で自己開示できるような雰囲気を作り出すことが, 快適な競技活動につながることを報告されている(清水, 2003). この自分自身の思いをありのままに表現し, 主張するような行為は人間関係を充実させ, 満足感を喚起すると考えられている(吉村, 1997). これらから,

運動部活動における満足感を喚起し, また周囲の状況から影響を受ける要因として自己開示にも着目する必要があるだろう. 運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の3変数を用いた検討は, 選手の満足感を高める運動部活動の有り様を一連のプロセスを通して理解することができるとともに, 実際の指導場面でコーチがチームづくりを進めていく上で, 有用な知見を提供することが期待される.

以上のことから本研究では, 運動部活動における動機づけ雰囲気と満足感に自己開示を媒介要因とした仮説モデルを設定(図1)し, 運動部活動における動機づけ雰囲気が自己開示, 満足感に及ぼす影響について検討することを目的とした.

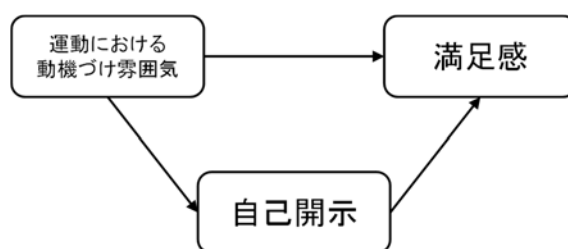


図1 3変数の関係を想定した仮説モデル

II. 方法

1. 調査対象者および手続き

大学において体育会の運動部活動(サークル活動は含めない)に所属する選手を対象に質問紙調査法を実施した. 調査は各運動部活動のキャプテンとコーチに対して依頼書と調査用紙のサンプルを手渡し, 調査協力の依頼を行った. 後日, 調査者が調査実施への了承を得ることができた各運動部活動に調査用紙を持参し, 各運動部活動で設けているミーティングの時間や選手が集まっている時間で調査用紙への回答を行ってもらい, その場で回答の確認と回収を行った. そのため, 調査を実施したすべての選手138名(男子80名, 女子58名, 平均年齢20.1±1.04歳)から欠損値のない調査用紙を回収することができた(有効回答率100%). 選手の内訳は, 女子バレーボール部14名, 女子バスケットボール部8名, 男子バスケットボール部22名, 女子ハンドボール部10名, 水泳部16名, アメリカンフットボール部15名, バドミントン部18名, 陸上部35名であった.

2. 調査時期

調査は, 平成23年2月から3月中旬にかけて実施した.

3. 調査内容

(1) 運動部活動における動機づけ雰囲気

運動部活動の動機づけ雰囲気を測定する尺度には, Newton et al.(2000)の尺度を参考に作成した. 熟達雰囲気に関する4項目と成績雰囲気に関する4項目の合計8項目で構成された質問文は, すべて「クラブでは, 」で始まり, そのあとに項目が続くというものであった. 回答方法は, 各項目について「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(4点)」の4段階で評定するよう求めた.

(2)自己開示

自己開示を測定する尺度には、伊藤・松井(2001)の尺度を参考に 4 項目を作成した。質問文は、すべて「クラブでは、」で始まり、そのあとに項目が続くというものであった。回答方法は、各項目について「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(4点)」の 4 段階で評定するよう求めた。

(3)満足感

満足感を測定する尺度には、吉村(1993)の尺度を参考に作成した。吉村(1993)によると、運動部活動の満足感には、部活動そのものに対する満足感と部員相互の人間関係に対する満足感の両方があることが述べられている。その点を考慮し、本研究ではクラブ自体への満足感 2 項目と部員への満足感 2 項目の合計 4 項目を設定した。回答方法は、各項目について「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(4点)」の 4 段階で評定するよう求めた。

なお、(1)から(3)までの各調査に関する項目内容の一覧は表 1 に示すとおりである。

表 1 各調査の項目内容一覧

	項目内容
熟達雰囲気	X1 みんなが互いに助け合っている。
	X2 一人一人が大切な役割を担っている。
	X3 苦手な技能を克服することを目指している。
	X4 互いに助け合うことを大切にしている。
成績雰囲気	X5 主力選手が注目を浴びる。
	X6 他の選手よりも上達することを重視している。
	X7 よい成績を収めた選手だけが称賛される。
	X8 誰よりもよいプレーをすることを重視している。
自己開示	X9 個人的な問題を安心して話せる。
	X10 自分たちの気持ちを気軽に言い合える。
	X11 休憩時間やクラブ後に自由にふざけたりできる。
	X12 意見を素直に話せる。
クラブ自体への満足感	X13 クラブのない大学生活は考えられない。
	X14 クラブは自分の生活にとってなくてはならない。
部員への満足感	X15 クラブでは部員みんなを信頼している。
	X16 自分の所属しているクラブはまとまりがある。

4. 統計解析

分析は、確認的因子分析および共分散構造分析を行った。確認的因子分析は、各測定尺度の因子構造(本研究では、運動部活動における動機づけ雰囲気の 2 因子構造、自己開示の 1 因子構造、満足感の 2 因子構造)に調査したデータが合致するか否かを確認する手法であり、各測定尺度の妥当性を検討することができる。共分散構造分析は、複数の変数を研究仮説に基づき設定したモデルの妥当性を確認する手法であり、本研究において設定した仮説モデル(図 1)の妥当性を検討することができ

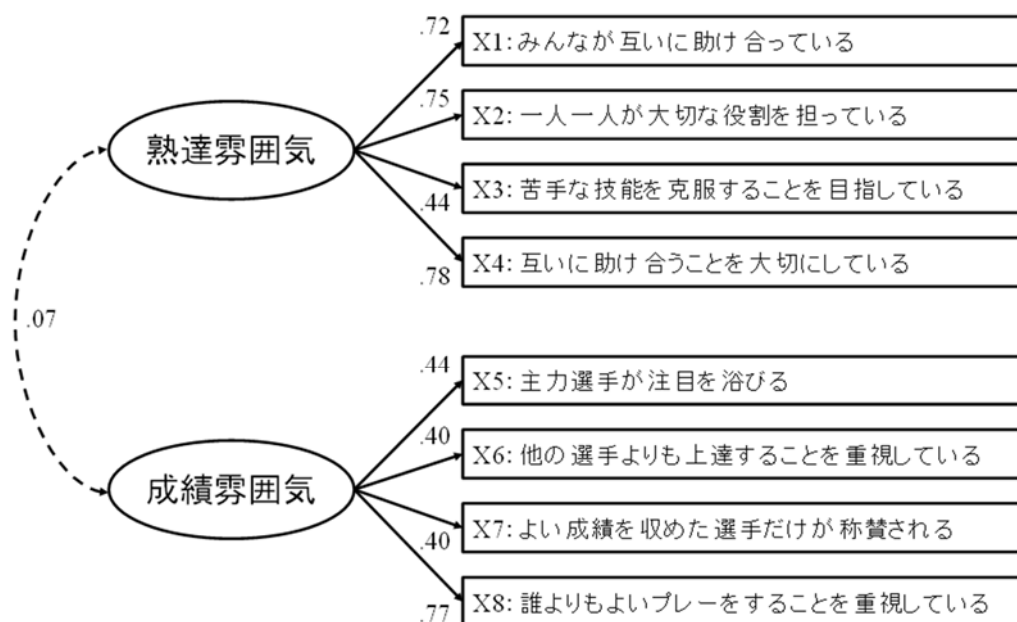
る。両分析の適合度は、GFI(Goodness of Fit Index), AGFI(Adjusted Goodness of Fit Index), CFI(Comparative Fit Index), RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)の各指標から検討した。これらの適合度指標によって、適切なモデルを構築しているか否かを判断した。上記の分析以外には、各測定尺度の信頼性を示すクロンバックの α 係数の算出、基本統計量(平均値, 標準偏差, 相関係数)の算出を行った。5%有意水準のもとすべての分析には、統計パッケージの IBM SPSS 22.0 および IBM SPSS Amos 22.0 を使用した。

III. 結果

1. 各測定尺度の分析

図2から図4は各測定尺度の確認的因子分析を行なった結果である。各図に示す楕円形は直接観測されない潜在変数を表し、長方形は直接観測される観測変数を表している(なお、これらは次のモデルの評価で示す図5にも共通している)。

まず、運動部活動における動機づけ雰囲気の下位尺度である熟達雰囲気の下位尺度である熟達雰囲気の4項目と成績雰囲気の4項目で構成される2因子モデルについて確認的因子分析を行ったところ、モデルの適合度指標は、GFI=.941, AGFI=.888, CFI=.908, RMSEA=.080 となり、AGFIの値がやや低い値を示したが、0.9に近くGFIとの差が大きくないこと、GFI, CFI, RMSEAの3つの適合度指標が基準値を十分に満たしていることから、モデルの適合度は許容範囲内であると判断した。また潜在変数から観測変数へのパス係数は全て有意($p < .05$)であった(図2)。クロンバックの α 係数は、熟達雰囲気が $\alpha = .76$, 成績雰囲気が $\alpha = .57$ を示した。よって、運動部活動における動機づけ雰囲気を測定する尺度は妥当性と信頼性を有することが確認された。

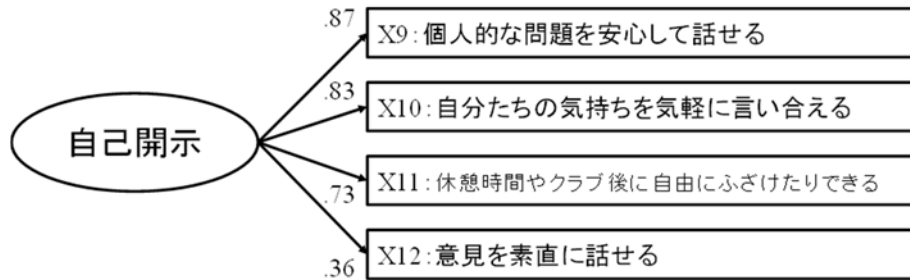


適合度指標

GFI=.941 AGFI=.888 CFI=.908 RMSEA=.084

図2 運動部活動における動機づけ雰囲気測定尺度の確認的因子分析の結果

続いて、自己開示の4項目で構成される1因子モデルについて確認的因子分析を行ったところ、モデルの適合度指標は、GFI=.991, AGFI=.954, CFI=.997, RMSEA=.046となり、基準を十分に満たす値を示した。また潜在変数から観測変数へのパス係数は全て有意($p<.05$)であり(図3)、クロンバックの α 係数は $\alpha=.79$ を示した。よって、自己開示を測定する尺度は妥当性と信頼性を有することが確認された。

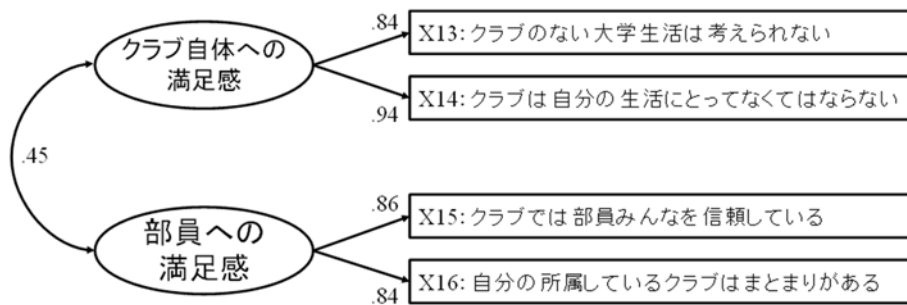


適合度指標

GFI=.991 AGFI=.954 CFI=.997 RMSEA=.046

図3 自己開示測定尺度の確認的因子分析の結果

最後に満足感のクラブ自体への満足感の2項目と部員への満足感の2項目で構成される2因子モデルについて確認的因子分析を行ったところ、モデルの適合度指標は、GFI=.997, AGFI=.970, CFI=1.000, RMSEA=.000となり、基準を十分に満たす値を示した。また潜在変数から観測変数へのパス係数はすべて有意($p<.05$)であった(図4)。クロンバックの α 係数は、クラブ自体への満足感が $\alpha=.88$ 、部員への満足感が $\alpha=.83$ を示した。よって、満足感を測定する尺度は妥当性と信頼性を有することが確認された。



適合度指標

GFI=.997 AGFI=.970 CFI=1.000 RMSEA=.000

図4 満足感測定尺度の確認的因子分析の結果

確認的因子分析によって因子構造が確認された尺度の得点について、平均値、標準偏差、相関係数を算出し、表2に示した。尺度間の相関は、熟達雰囲気は自己開示($r=.48$)、クラブ自体への満足感($r=.28$)、部員への満足感($r=.53$)と有意な正の相関を示した。自己開示は、クラブ自体への満足感

($r=.41$), 部員への満足感($r=.82$)と有意な正の相関を示した. クラブ自体への満足感と部員への満足感には有意な正の相関($r=.38$)を示した.

表 2 各測定尺度の基本統計量(平均値, 標準偏差, 相関係数)

項目	平均値	標準偏差	相関係数				
			①	②	③	④	⑤
① 熟達雰囲気	3.30	0.53	—	.08	.49 *	.28 *	.53 *
② 成績雰囲気	2.66	0.50		—	.04	.07	.09
③ 自己開示	3.14	0.59			—	.41 *	.82 *
④ クラブ自体への満足感	3.39	0.73				—	.38 *
⑤ 部員への満足感	3.14	0.71					—

* $p < .05$

2. 仮説モデルの評価

図 5 に示す観測変数内の X1 から X16 には, 図 2 の X1 から X8, 図 3 の X9 から X12, 図 4 の X13 から X16 の項目が位置づけられている. 共分散構造分析を行った結果, 設定したモデルの適合度指標は, GFI=.917, AGFI=.881, CFI=.981, RMSEA=.036 であり, AGFI の値がやや低い値を示したが, 0.9 に近く GFI との差が大きくないこと, GFI, CFI, RMSEA の 3 つの適合度指標が基準値を十分に満たしていることから, モデルの適合度は許容範囲内であると判断した. よって, 設定した仮説モデルは妥当性を有することが確認された. 説明力を示す決定係数(以下 R^2 とする)は, 自己開示は $R^2=.39$, クラブ自体への満足感は $R^2=.22$, 部員への満足感は $R^2=.94$ を示した. 個別にパス係数をみると, 成績雰囲気は, 自己開示($\beta=.07$), クラブ自体への満足感($\beta=.03$), 部員への満足感($\beta=.05$)のすべての変数との間に有意なパスは確認されなかった. 熟達雰囲気は, 自己開示を高め($\beta=.61, p<.05$), その自己開示がクラブ自体への満足感($\beta=.40, p<.05$)と部員への満足感($\beta=.89, p<.05$)を高めるという間接的な関係を示した. しかし, 直接的な関係である熟達雰囲気からクラブ自体への満足感($\beta=.09$)と部員への満足感($\beta=.11$)に有意なパスは確認されなかった.

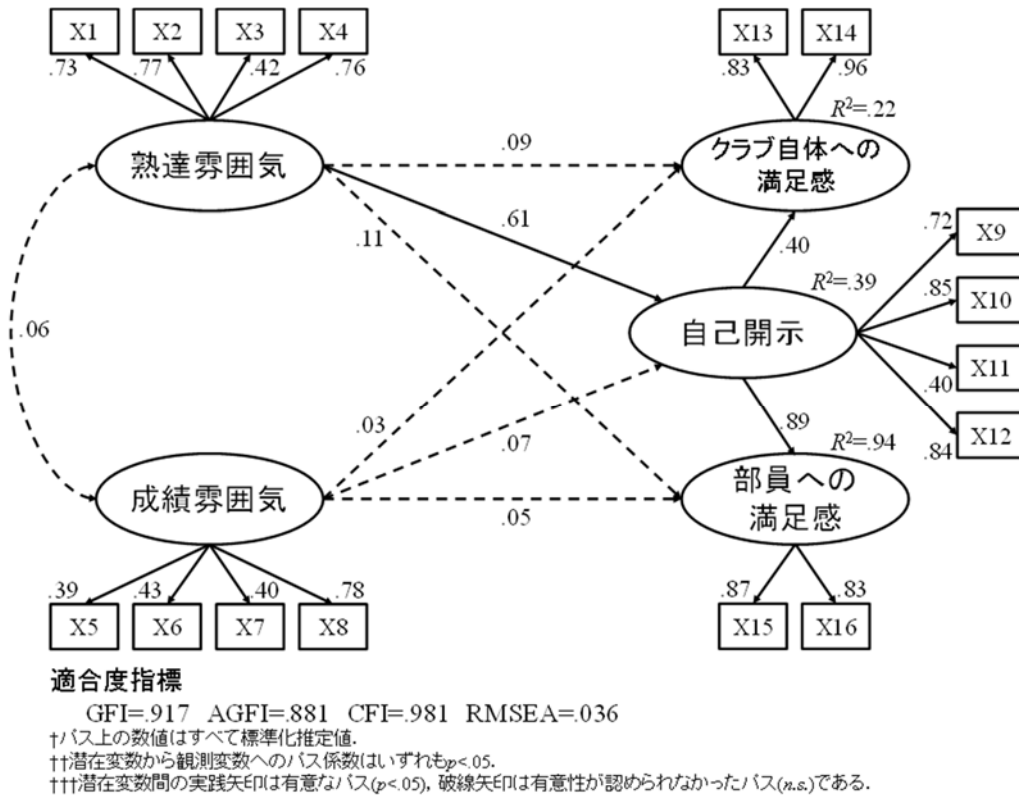


図 5 運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足感の関係

IV. 考察

本研究は、運動部活動における動機づけ雰囲気、自己開示、満足感の関係について検討することが目的であった。本研究の目的を遂行するために動機づけ雰囲気が選手の自己開示を促し、その自己開示が満足感に影響を与えるといった間接効果と動機づけ雰囲気が満足感に影響を与えるといった直接効果を想定した仮説モデルを設定した。設定した仮説モデルが妥当であるかを確認するために、共分散構造分析を行ったところ、適合度は基準値を満たす良好な値であり、設定した仮説モデルは妥当なものであった。また満足感への説明率は、それぞれクラブ自体への満足感で 22%、部員への満足感で 94%を示しており、本研究におけるモデルは運動部活動における動機づけ雰囲気、自己開示、満足感が関係することを説明する有力なモデルの 1 つとして位置づけることができるだろう。なお、確認された有意なパスは、すべて正の影響を示すものであった。これらの結果に基づき 1. 成績雰囲気が自己開示、満足感に与える影響、2. 熟達雰囲気が自己開示、満足感に与える影響、3. 運動継続への満足感向上を意図したチーム雰囲気づくり、について考察する。

1. 成績雰囲気が自己開示、満足感に与える影響

まず、成績雰囲気の側面について述べると、成績雰囲気には自己開示、クラブ自体への満足感、部員への満足感に影響を与えるパスは確認されなかった。これは、選手が所属する運動部活動について成績雰囲気であると強く認識すると、自己開示や運動部活動への満足感が育まれないことを示唆している。運動部活動における成績雰囲気の特徴は、選手同士で競い合わせることや他の選手よりも良い成果・成績を上げることが重視されており、チーム内で自己の実力がどの程度なのか明確になる。そ

こでの選手は、練習でのミスや他の部員との勝敗を過度に意識し、同じチームの部員であっても単に敵対する対戦者として位置づけられる。そのような雰囲気の下では、他者との間で自分の思いを率直に伝えることや安心して個人的な問題を話すといった行為は促進されないと推測される。また、自己の生活の中で運動部活動の重要性はそれほど高くなり、部員を信頼し、凝集性を高めるには至らないことも示唆された。

2. 熟達雰囲気が自己開示、満足感に与える影響

次に、熟達雰囲気の側面について述べると、熟達雰囲気と自己開示に有意な正のパスを示すこと、そして、その自己開示はクラブ自体への満足感および部員への満足感に有意な正のパスを示すことを確認した。これは、選手が所属する運動部活動について熟達雰囲気であると強く認知すると、自己開示が促進され、運動部活動自体やそこでの部員との人間関係に対して満足感が向上することが示唆される。運動部活動における熟達雰囲気の特徴は、選手同士で競い合うというよりも、選手一人ひとりが苦手な技能の克服を目指し、互いに助け合うことを大切にしているというものである。このような雰囲気では、ミスを経験したとしても、それは練習の一部として見なされるため不安は喚起されにくく、また技能向上の有無を絶対評価によって判断することから周囲に対する敵対行動をとることも少ないと言われている(中須賀ほか, 2014)。そのため、部員を敵対する者として見なすのではなく、互いの技能について意見交換でき、励まし合える者として見ている可能性がある。この意見交換や激励が、部員の間でみんなに相談したいや自分の気持ちを伝えたいという行為を促進させると考える。これらの行為が気兼ねなくできる運動部活動は、部員の大学生活にとってありのままに自分の思いを伝えることのできる大切な場所として認識されると同時に、互いを信頼し合える絆の強い仲間も自分の周りにいてくれているという満足感が高められるのではないかと推察される。そのような満足感は、運動に対する否定的な考えを抑制し、共に運動をする仲間の大切さの理解や引退後の良好な友人関係の構築の上で肝要であり、ひいては将来的な運動継続を促進する効果が期待される。

ただし、成績雰囲気と同様にクラブ自体への満足感と部員への満足感に有意なパスは確認されなかったことは、運動部活動が熟達雰囲気であると強く認識されても運動部活動への満足感の向上につながらないことを示唆している。つまり、熟達雰囲気を強調して、それを部員が強く認知されても、その中で自己開示を積極的に行なえない部員は満足感獲得が困難になるだろう。このことから、コーチには、部活動以外のミーティングの時間を利用し、自己および他者への理解を深めるような取り組み(例えば、ブレインストーミングなど)を実施していくことも求められるであろう。

3. 運動継続への満足感向上を意図したチーム雰囲気づくり

生涯にわたる運動継続は、運動部活動での積極的な関わり、雰囲気、役割などへの満足感が今後の運動継続を促進するという指摘(浪越ほか, 2003)からもわかるように、運動部活動そのものやチームメイトとの関係に満足していることが大切である。部員の満足感を高めるには、運動部活動において熟達雰囲気を強調したチームをつくるとともに、その中で自己開示を促進させることが必要であることが本研究結果から確認できた。つまり、部員にとって「このチームは最高だ。チームメイトとの絆は強い。」と満足できる運動部活動は、熟達雰囲気を基盤につくられていくということが示唆された。これらには、中

高年以降の運動習慣を促す運動部活動からの退部者の抑制効果もあることから、将来的なスポーツ活動の推進に重要な役割を果たすことが期待できる。この熟達雰囲気は運動部活動で作り出すには、無理のない自分たちで確認できる短期的目標を設定させること、努力の機会を与えること、ミスを学習の一部としてみることができるようになるように勇気づけることなど(Ames, 1992)をチーム内で強調することが必要である。ただし、指導現場において選手が何を求めているのかといった点には注意する必要がある。例えば、「チームで競技力向上を目指している場合、成績が芳しくなくても人間関係が良好であればこのチームは最高だ」と言えるかという点と必ずしもそうではなく、チームの掲げる目標と成果の不一致が満足感の向上を阻む可能性は想定できる。チームの雰囲気づくりでは、チームの目標や活動趣旨によって、チームの良し悪しに対する認知の仕方や選手の結果(成績)への価値観は多少異なることは考慮しておく必要があるだろう。このことから部員やチームへの満足感だけではなく、記録や成績といった技能レベルに対する満足感に着目した検討も今後必要になる。

V. まとめ

本研究における結果のまとめとして以下の3点に示す。

1. 成績雰囲気には自己開示、クラブ自体への満足感、部員への満足感に影響を与えるパスが確認されなかった。選手が所属する運動部活動について成績雰囲気であると強く認識すると、自己開示や運動部活動への満足感が育まれないことが考えられる。
2. 熟達雰囲気は自己開示に正の影響を示し、その自己開示はクラブ自体への満足感および部員への満足感に正の影響を示した。選手が所属する運動部活動について熟達雰囲気であると強く認識すると、自己開示が促進され、運動部活動自体やそこでの部員との人間関係に対して満足感が向上することが考えられる。
3. 部員にとって「このチームは最高だ。チームメイトとの絆は強い。」と満足できる運動部活動は、熟達雰囲気を基盤につくられていくということが考えられる。これらには、中高年以降の運動習慣を促す運動部活動からの退部者の抑制効果もあることから、将来的なスポーツ活動の推進に重要な役割を果たすことが期待できるだろう。

VI. 今後の課題

本研究では運動部活動における満足感向上を予測するプロセスについて動機づけ雰囲気と自己開示という観点から検証を行い、一定の有用性を持つモデルが確認されたが、それは一度の調査で収集されたデータを基に分析して得られた結果である。そのため、本研究の結果が一般化できるまでには至っていない。今後は継続的に調査を実施し、経時的変化について検討していくことが求められるだろう。その際、測定時期については十分に考慮する必要がある。例えば、本研究は2月から3月という一般的に上級生が引退した後の新チーム移行期に調査を実施した。これが4月から6月の新チーム編成時期や7月から8月の試合期など時期によってどのように変化していくのかが明確にされなければ運動部活動における満足感の形成メカニズムについて解明されたとは言えないからである。また、運動部活動に満足している学生がその後のスポーツ活動に積極的になるか否かを証明するには、運動部活動から引退した学生に焦点を当てて調査を行っていくことも必要である。これらを今後の課題とした

い.

Ⅶ. 注

注 1) 動機づけ雰囲気とは、重要な他者(コーチや部員)によってつくられる雰囲気と定義づけられる(西田・小縣, 2008)

注 2) 成績雰囲気とは、能力に価値が置かれ、他者との比較を通しての達成を重視している雰囲気のことであり、熟達雰囲気とは、努力に価値が置かれ、学習や熟達のプロセスそのものを重視している雰囲気のことである(Ames and Archer, 1988; Seifriz et al., 1992; Papaioannou, 1994).

Ⅷ. 参考文献

- Ames, C. (1992) Classroom: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, 84(3): 261-271.
- Ames, C. and Archer, J. (1988) Achievement goal in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80(3): 260-267.
- 青木邦男(1989)高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因. *体育学研究*, 34(1):89-100.
- 青木邦男・松本耕二(1997)高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因. *体育学研究*, 42(4):215-232.
- 伊藤亜矢子・松井仁(2001)学級風土質問紙の作成. *教育心理学研究*, 49(4):449-457.
- Moreno-Murcia, J. A., Cervelló, E., and González-Cutre, D. (2008) Relationships among goal orientations, motivational climate and flow in adolescent athletes: differences by gender. *The Spanish Journal of Psychology*, 11(1): 181-191.
- 中須賀巧・須崎康臣・阪田俊輔・木村彩・杉山佳生(2014)動機づけ雰囲気および目標志向性が体育授業に対する好意的態度に与える影響. *体育学研究*, 59(1):315-327.
- 浪越一喜・藤井和彦・谷藤千香・井崎美代(2003)運動部活動経験が大学生のスポーツ生活に与える影響. *千葉大学教育学部研究紀要*, 51:129-136.
- Newton, M., Duda, J., and Yin, Z. (2000) Examination of the psychometric properties of the perceived motivational climate in sport questionnaire-2 in a sample of female athletes. *Journal of Sports Sciences*, 18(4): 275-290.
- 西田保・小縣真二(2008)スポーツにおける達成目標理論の展望. *総合保健体育科学*, 31(1):5-12.
- 丹羽空・丸野俊一(2010)自己開示の深さを測定する尺度の開発. *パーソナリティ研究*, 18(3):196-209.
- 岡田純一・鳥居俊・宮内孝知・柳谷登志雄・加藤清忠(2003)大学運動部歴と中高年期における身体活動の関連性に関する研究. *早稲田大学体育学研究紀要*, 35:25-35.
- Ommundsen, Y., Lemyre, P-N., Abrahamsen, F., and Roberts, G. C. (2010) Motivational climate, need satisfaction, regulation of motivation and subjective vitality. A study of young soccer players. *International journal of sport psychology*, 41(3): 216-242.
- Papaioannou, A. (1994) Development of a questionnaire to measure achievement orientations in

physical education. Research Quarterly for Exercise and Sport, 65(1): 11-20.

- Seifriz, J. J., Duda, J. L., and Chi, L. (1992) The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. Journal of Sport and Exercise Psychology, 14(4): 375-391.
- 清水安夫(2003)スポーツにおける自己開示と表現. 体育の科学, 53(12):925-929.
- 角谷詩織・無藤隆(2001)部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足感とのかかわりにおいて—. 心理学研究, 72(2):79-86.
- 高見和至(1996)男子中学生の自己開示からみた学校部活動の検討. 川村学園女子大学研究紀要, 7(2):51-60.
- 鶴山博之・大門信吾(2005)大学生の運動経験と運動意欲に関する研究. 国際教養学部紀要, 1:81-91.
- 横田匡俊(2002)運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47(5):427-437.
- 吉村斉(1993) 運動系部活集団における人間関係と学校生活への満足度について—生徒の部活動・学習に対する積極性と主将の指導との交互作用効果—. 高知学園短期大学紀要, 24:789-801.
- 吉村斉(1997)学校適応における部活動とその人間関係のあり方—自己表現・主張の重要性—. 教育心理学研究, 45(3):337-345.